



ファンタジー設定 で∞のお題



じゅしん

命を写真に収める地球に優しいクラスメイト

私には、それは消えてしまったように見えた。
拾い上げた写真に写っている二人は、もう目の前にいない。

「あ…」

消えた。そう、消えたという言葉がぴったりだったのだ。

「消えた、よね？」
「ん？まあ、そうだな」

名前も思い出せない彼…。クラスメイトが、私から写真を奪った。
首からポラロイドカメラを掲げている。写真部。そう、写真部の…。

「鴨川さんて、この辺だったんだ？」
「う、うん」

にこやかな笑顔を浮かべているけれど、妙に空々しく感じる。
あのカメラのシャッターを切ろうとした瞬間、彼に殴りかかろうとしていた不良たちが消えたのだ。まるで最初からいなかったみたいに。

「ま、またね!!」

振り向きもせずに走って家に帰った。塾をサボった私を呆れたようすの母が出迎えた。でも私は、そんなこと気にならないくらいドキドキしていた。写真を撮ったら消えた。ねえ、これって、超能力か何かなんじゃない？
数時間前の出来事を思い出しては、わくわくする。同時に少し怖くもある。

●●●

私は、塾へ行くために急いでいた。途中で飲み物を買うためにコンビニに立ち寄ることにした。コンビニに立ち寄る時間を作るために急いでいたといった方が正しい。

コンビニには怖そうな人達があわわろしていた。できるだけ目を合わせないように、コンビニに入った。
そこで、立ち読みしているクラスメイトを見かけた。
確か写真部だったはずだ、と名前も覚えていないのに思ったのは、常に首からポラロイドカメラをぶら下げているから。もの静かで、あまり声を聞いたことがない。

しかし、私の高校は私立高校で、県内各地から生徒が集まるから家の近くでクラスメイトに会うなんて滅多にないからだろうか。

「……」

話しかけてみようかな。
そんなことを、思ってしまった。今思えば、放っておけばよかったのだ。

「…あ、あの」
「……………」

ねえ、と続けようと近づくと、彼はすたすたと出口に向かって歩き始めた。
空振りした右手が非常に痛々しい。

「…無視された…？」

さすがに、少しムツとして追いかけると、彼はコンビニの前にたむろしている不良達に何か話しかけている。
なんだろう、内容がよく聞こえない。

「ゴミを散らかすなよ」

え？そんなこと、言うの!?

ケンカなんかになったら、彼は絶対に勝てそうにない。

不良達はへらへら笑って立ち上がった。

「はいはい、すみませんねえ。大きな世話なんですけどお」

「止めとけよー、よっちゃん」

よっちゃんと呼ばれた方が、彼に殴りかかろうとした時、首から提げているポラロイドカメラのシャッターを切った。

どこからあんな光が出るのかと思うくらいの、目が眩むほどのフラッシュ。実際、一瞬目が眩んだ。真っ白な視界に色が戻ってきたときには、よっちゃんはもういなかった。

同じように眩しいフラッシュが光るたびに不良達は次々に消えていった。

私はポラロイドカメラから私の近くに落ちてきた写真を拾い上げた。

ぱたぱたと振ると現れた、不良の姿。

でも、彼らはもう目の前にはいない。

「……消えた…の？」



昨日のことは、現実だったのだろうか。

「おはよう…」

「……………」

「ちょっと…聞きたいことがあるんだけど…」

名前は、昨日の夜名簿を見て思い出した。

「堀田くん」

彼はチラリと私を見て、面倒そうに教室から出て行った。

「ちょっと、待ってよ！」

「何？」

「昨日、コンビニで会ったでしょ」

「ああ…。なんか、意味不明なこと言ってたけど、頭大丈夫？」

「き、消えたじゃん！その、カメラで撮ったら…！」

彼は一瞬の沈黙の後、またどこかへ歩き出した。ついていったら、何かわかるかな。

「本当に、人が消えるようなことがあると思ってるの？」

「…も、もしかしたら、とは思ってる。誰にも言わないから！」

彼が突然立ち止まったので、真後ろにいた私はぶつかってしまった。見た目より背が高いなあ。

堀田くんが入った教室、写真部の部室は薄暗かった。

「鴨川の認識に間違いはないよ」

「…やっぱり…。写真に人を閉じ込めるのね？」

「このポラロイドだけ。古いだろ。じいちゃんが写真屋なんだ」

「そうなのね…」

「俺は、一応…環境に悪いやつをターゲットにしてる」

それが、昨日のよっちゃん達ってことね。

「なんで？」

「ん？」

「なんで環境なの？」

「いろいろあるんだよ。このカメラが環境専門ってだけだ」

「じゃあ、他にもいるの？」

「さあな。俺の話はこれで終わり。誰にも言うなよ？」

「うん。言わないよ。堀田くんが超能力者なんてバレたら大変だもんね」

名前も知らなかったくせに、私も現金だな。

「だから、よかったら付き合ってください！」

「はあ？」

recollection ——彼の言い訳——

返事は今じゃなくていいから。

薄暗い部室を選んでよかった。耳まで真っ赤になったのは、絶対に見られたくない。

「…いいのか、コレ…」

でも元々、この部屋を選んだのは笑ってしまうのを隠すためだった。

写真に人を閉じ込められるなんてこと、あるわけない。

昨日の奴らはフラッシュで鴨川の目が眩んでいる間に走って逃げただけのことで、「消えた」と言って鴨川が目を輝かせているのが、妙に面白かった。だから、少しからかってやるつもりで、そうだと言ってやった。

「…はあ」

なかなか可愛いじゃねえか、ちくしょう。鴨川が写真を撮れば人が消えると信じるならば、それでもいいのかもしれない。

付き合うかどうかは別問題としても、嘘はつき続けてやろうじゃないか。

命を写真に収める地球に優しいクラスメイト——了

恋愛感情を届けるナルシストな幽霊

「何やってんの？」

ここは屋上。

屋上は出入りが自由だけど、鍵を閉めてしまったので、俺以外にはいないはずだった。

振り向いてみれば、さわやかな顔の優男。

「…お前、どうやってここに入ったんだ？」

「ああ、驚いてるね。まあ、仕方ない…僕は美しいからね」

「は？」

「ああ、それとも血を流してなお美しいから、驚いてるのかな？」

そう言いながらそいつが髪をかき上げると、確かに頭から出血していた。

「お、おい、こんなところでのんきに喋ってる場合じゃねえだろ！救急車呼ばねえと!!」

「あ、待って。大丈夫だから…あー…ほんとは大丈夫じゃないんだけどね」

俺が携帯を取り出すのを制しながら、男は笑う。

「何言ってるんだよ」

「もう手遅れだから」

「諦めるなよ!!」

「いやいや、僕、幽霊だから」

「!!!!!!」

幽霊はさわやかに笑った。

「あ、驚いてるね。こんなに美しい幽霊、見たことなかったんだろ？」

「美しい美しいって…お前ナルシストだな」

「何言ってるんだい。美しいものを美しいと言って何が悪いんだ？」

ついでにその気取った喋り方も癪に障るが、言ったらまた何を言ってるんだい、と返されるのが関の山だろうから、黙っておく。

「お前、何でこんなところにいるんだよ。まだ日中だぞ」

「どういう基準か知らないけど、君には関係ないね。君に関係するのはあの女の子じゃないのかい？ああ、まだ泣いてる」

幽霊がチラリと見遣った教室では、確かに栗色の長い髪の奴が泣いているのを見て取れた。

「お前には関係ないだろ」

「ないことはないさ。でも、美しいものはいつだって何かしら差別化されるものだね。可哀想に、あの子も」

こいつ、絶対この性格のせいで殺されたんだな。

「あの子は何で泣いてるの？」

「さあな。俺がムカつくとか嫌いとか言ったからじゃねえの」

「じゃあ、何でそんなこと言われて泣くと思う？」

「…知るかよ」

「質問を変えよう。君は、あの子が泣いていて心が痛んでいるだろう？」

「…全然」

「じゃあ、何であの教室が見えるところにこうして座っているんだい？」

「偶然だろ」

癪なので移動することにした。

「おや、凶星かい？」

「……………」

やっぱりムカつくのでその場にとどまることにした。

「君は、何で心が痛むんだと思う？」

「だから痛んでねえって」

「何であの子が気になるんだと思う？」

「気にならねえ」

「じゃあ、何であの子を傷付けるようなこと言ったの？」

「…それは、」

「気に入らないね。意味もなく傷付けたのかい？」

「違、」

「君は彼女が好意を寄せてるのを知っていて傷付けたんだろ？これ以上好かれたいために。嫌われて自分が傷付くのが嫌だから」

「違う！俺は！あいつが傷付くのが嫌だった!!俺は…もうすぐここからいなくなるから…」

「それを愛って言うんだよ」

「……………は？」

呆気にとられて見ている俺を尻目に、幽霊はバサッと手を広げた。

「さあ、伝えておいで、今の言葉を！ああ、世界はなんて愛に満ち溢れてて美しいんだろうね!!」

うぜー。

…けど…。

「…わかったよ。じゃあな、幽霊」

「ああ、恋の相談は僕にお任せ！」

俺が歩き出すのを、幽霊は見送ったようだった。

Soliloquy——独り言——

「ふう…」

彼が去った後、僕は額の血糊を拭った。

「馬鹿だなあ…幽霊なんているわけじゃないか」

ついでに、カラーコンタクトレンズを外すと、彼の教室を見た。

彼と、泣いている人が何か話している。

「貸し一つだからね、姉さん」

彼もあんな悪女に捕まって可哀想に。引っ越すのは正解だ。

まあ、弟である僕は一生彼女のパシリなんだけど…。

「しかし、単純と言うかなんとか…」

彼の言葉は、ほぼ姉のシナリオ通りだった。

あの女、蜘蛛みてえ…。

僕は、そんなことを思ってくすくすと笑った。

ちょうど、その時、屋上の扉が開いた。

「ふふふふふ…ねえ、うまくやったようね、諒ちゃん」

「…どうなったの？」

「『遠距離で良ければ付き合っ』って言われたわ。もちろん即 OKよ」

「……で、彼をどうするの？」

「ボロボロになるまで私に会いに来てもらうわ。それで、擦り切れそうになった時に優しく会いに行っあげると。そうしたらきっと…」

チェックメイト。

恍惚として言うのが恐ろしい。

「とにかく、貸し一つだからね」

「ええ、諒ちゃんのことだから購買の焼きそばパン一つでいいんでしょう？」

「はあ!？」

「いいんでしょう？」

え、笑顔が怖い。

僕は首が千切れるかと思うほど強く縦に首を振った。

姉が嬉しそうにくるりと一回転する。スカートがふわりと広がり、そして元の形に戻った。

「今日はなんていい日なのかしら、ねえ諒ちゃん」

僕はため息交じりに笑う。

結局は僕も、姉が笑顔ならいいのだ。

恋愛感情を届けるナルシストな幽霊——了

音楽を食べる有名なクラスメイト

見ちゃったんだ。

あの子が、放課後に、音楽室でね、楽譜を——…。

「…食べちゃったんだって、みーちゃんの友達が言うには」

「…馬鹿馬鹿しい」

「何でよ、渉汰みたいに超能力とかあるのかもよ。だって、足立さんって、オペラ歌手だもん。楽譜食べるから、上手いのかも！」

笑美——鴨川笑美——は、きらきりと顔を輝かせながら言った。

こいつまで俺が写真に人を閉じ込められるとか信じてるのか、とか、みーちゃんって誰だ、とか…いろいろ言葉は浮かんだが、可愛らしいと思うことにした。

こいつの頭だったらクラスメイトの半数が魔法使いやスーパーマンやってもすんなり順応するだろう。

「…足立さんって、誰だっけ」

「え、信じられない！今年から仕事があって学校に来る日は減ったけど、クラスメイトじゃない!!しかも中学校も一緒のはずだよ、渉汰は」

お前も俺の名前覚えてなかっただろ。

そう言いたいのを抑えて、とりあえず記憶を辿って足立の顔を思い出してみる。

「…音楽室、行ってみる？」

「は？」

「だって、気になるじゃない。みーちゃんが言ったことが本当なら、今日も楽譜を食べてるはず！」

「『みーちゃんの友達』だろ。それって誰だよ。典型的な噂だな」

笑美はぶうっと頬を膨らませた。

「だから確かめるんじゃないっ！」

「はいはい」

「はいはいつて何！」

笑美に引っ張られて音楽室へ向かう。

防音が施された壁でもなお、扉から響いてくる声。

オペラ歌手、だっけ。

「失礼しまーす！」

笑美がぼーん！と扉を開ける。

「な、おい、やめろ！」

「…えっと…鴨川さん、だよ。何か用？」

「あ、えっと…あのね、学校の七不思議を見に来たんだ！ほら、夜にベートーベンの目が動くとか言うじゃない？」

「…それって…夜に来なきゃ意味ないと思うんだけど…」

「う、うん、そうだよ。渉汰が急かすから一、もう…じゃ、じゃあね、足立さん、また明日！」

「うん、また…」

誰がいつ急かしたんだ。

笑美は俺を引っ張りながら、何やらブツブツ呟いている。

「食ってたな、楽譜」

そう言って初めて、笑美は歩くのをやめた。

「だよね…見間違いじゃないよね…」

驚いているのかと思ったが、きらきらした笑顔で俺を見た。

「やったね、涉汰、超能力仲間だよ！」

「……………」

頭いいのか悪いのか、はっきりしてほしい。

「…あーあ、私にもないかなあ、超能力」

「……………」

こういうとき、何て言えばいいんだろうか。

「…あ！」

「どうかしたか？」

「そういえば、超能力じゃないんだけどね、今はもう引越した先輩が、この学校にはナルシストな幽霊がいるって言ってたの！先輩も霊感あるんだよ！」

「へー」

「なのに！なんで私にはないの!？」

「霊感とか、あっても嬉しくないけどな…」

「う…確かに…でも、でもね、涉汰…。ちょっと、羨ましいんだよ。塾行って、勉強ばっかりしていると、たまにね、たまに…空を飛んでみたとか…思うんだ」

「そうか。痩せたら『お姫様だっこ』とかしてやるよ」

「…ひどいっ！」

食べてたな、楽譜。

After school in Music room ——放課後、音楽室にて——

今日も歌声が聞こえる。

カラリとドアを開けると、やはり足立がいた。

「何か用なの？昨日も来たよね…鴨川さんと。付き合ってるの？」

「まあな。…ああ、やっぱりな」

「何言ってるの？」

「噂があるんだ。『足立が楽譜食べてる。だから歌が上手いんだ』って」

「へー、初耳」

足立はまた一口、楽譜が描かれたホワイトチョコレートをかじった。

「見に来てもしすぐに逃げるから、香りまでは気付かないんだろうな」

「…ああ、そういうこと…」

「でも、気にしなさいさうだし…誤解解くつもりないだろ？」

「うん…、わざわざ言うのもおかしいし」

「じゃあな、笑美は信じたいみたいだし、超能力者」

「ふふふ、鴨川さんの為なのね。中学時代からは想像もつかない」

「…じゃあな、足立」

「さようなら…堀田くん」

音楽を食べる有名なクラスメイト——了

嘘を消してまわる金髪のロボット

私の隣のクラスには、ハーフの子がいます。

色白で、金髪がとっても似合う男の子です。

渉汰は少し苦手みたいだし、私が他の男の子と必要以上に話すの嫌がるけど、それでも少しでいいからおしゃべりしてみたい、なんて思っています。

だって彼、絵本から抜け出してきた王子様みたい！

「それで、おしゃべりしてどうするんだ？」

「え？あわよくば白タイツにかぼちゃパンツを…」

「篠崎のためにもやめておけ!!!」

もー、渉汰はわかってないんだから。

篠崎くん、絶対に白馬が似合うのに!!!

「呼んだ？」

「あ！篠崎くんっ、あのね、もごっ」

渉汰に口をふさがれて、篠崎くんが変な目で見てます。

「何でもない」

「いやだーっ、白タイツー！」

篠崎くんは首をかしげていました。

「もう、邪魔しないでよね！もしかしたら穿いてくれるかもしれないじゃん！」

「穿くわけねえだろ。どんだけ心広いやつだよ!!!」

そういえば、と渉汰は言いました。

「篠崎ってな、ロボットらしいぞ。今までの超能力者達とはタチが違うから近付くのは止めといた方がいいぞ」

「なんでさっき話すチャンスがあるとき言ってくれなかったの！」

「え？」

「ロボットだなんて！人工知能ってやつかな!？」

「笑美、俺がさっきなんて言ったか聞いてた？」

「質が違うから近付かない方がいい、でしょ？そんなバカなことってないよ！」

「『俺達みたいなやつ』を捕まえるために派遣されてきたロボットかも知れねえだろ？」

「それならなおさらだよ！渉汰はいい人だって教えなきゃ！」

思い立ったらいてもたってもいられなくて、私はもう一度篠崎くんの元へ向かいました。

「篠崎くんっ！」

「何…？」

「篠崎くんってさ、ロボットってほんと!？」

「……………それ、って…………」

篠崎くんは一瞬固まりましたが、ニヤリと意味深長に笑いました。

「何で知ってんの？」

「やっぱり！ねえねえ、人工知能なの!？あとね、もう一つ聞きたいんだけど超能力者を捕まえるために派遣されてきたんじゃないよね!？」

「うん、違うよ。オレ、嘘を消してまわるロボットなんだ」

「よかったあ。間違うとこだったよー。用意してた白タイツとかぼちゃパンツは渉汰に穿いてもらうね！」

「白タイツ…？」

「用意してたのかよ」

「あ、渉汰。遅かったね！篠崎くんは悪いロボットじゃなかったよ！」

「そうか。よかったな」

渉汰は呆れながらインスタントカメラのシャッターを切りました。超能力者や宇宙人やロボットを見つけたら並んで撮ってもらいます。もちろん最初は渉汰と並んで自分でシャッターを押しました。

「篠崎くんは今までどんな嘘を消してきたの？」

「んっと、それは企業秘密で言えないんだ」

「そうなんだ一。残念だなあ。あ、でも渉汰、仲間いっぱい増えつつあるね！」

「仲間…？」

「…企業秘密だ。帰るぞ、笑美。またな、篠崎」

「うん…」

Secret Conversation——ロボットと超能力者——

「悪いな、変な嘘吐かせちまって」

「別に？『ロボット』なのは嘘じゃないし」

篠崎は感情をあまり表に出さず、やることなすこと完璧なので、ロボットと呼ばれる。けれどそれは、褒め言葉でもなんでもない、陰口だ。

「知ってたのか」

「まあね。鴨川さんは悪意もなかったし、合わせてあげるのもいいかなあと思って。現に『僕がロボットじゃない』っていう鴨川さんにとつての嘘は消したわけだし」

「ありがとな」

「いいんだよ。君も、鴨川さんに救われた一人なんだね」

「一人目、だよ」

訂正すると篠崎はニヤリと笑った。

「オレはね、堀田。彼女にロボットと呼ばれるのは、悪くないと思うんだよ」

「…？」

「王子様でもいいけど」

「……笑美はロボットより超能力者の方が好きなんだぜ？」

「へえ、でも、本当に？」

嘘を消してまわる金髪のロボット——了

罪を売る嘘つきな双子

「ってわけで、私達は、悪くないと思うの」

「そうだね、悪くない」

「お前らなあ！」

靴箱付近で、何やら人だかりができていた。

無視して通り過ぎようとする俺の腕を捕まえ、笑美も人だかりの中心をのぞき込んだ。野次馬根性丸出しだな、こいつ。

「あれは…」

「うちの学年の双子だね」

「…篠崎」

笑美の肩をぼんっと叩く、金髪の男。笑美には嘘を消すロボットだとか嘘を吐いている隣のクラスの篠崎だ。

「うん、香月ちゃんと、星哉くんだよ」

「あー、あいつらか」

去年姉の方と同じクラスだった。休み時間ごとに弟が教室を訪問してくるので、女子がきやあきやあ騒いでいた。

「去年同じクラスだったけどな、たぶんあいつらが悪いんじゃないかねえの。嘘吐きなんだよな」

「一方的に悪く言うなんて、だめだよ。何か理由があるのかも！」

「そうだ、鴨川さん」

篠崎が、笑美にひそひそと何か話している。

「…よし、行こう涉汰！」

「出た、このパターン」

俺が首を振ると、笑美は俺のかばんを掴んだ。

「もう、行きたくないの？」

「…いや、別に」

「じゃあ、オレと一緒に行こうか？」

篠崎がにこにここと進言する。

こいつマジで笑美に惚れてるのだろうか。

「え、いいの？」

「あーもう、俺が行くから！篠崎お前帰れ！」

「ひどいなあ、別にいいじゃないか」

「そうだよ、仲間はずれはよくない！」

「…笑美、こいつは…」

「考えてみてよ！嘘を消すロボットvs嘘吐きな双子だよ!？」

笑美の肩越しに、篠崎の笑顔が固まったのが見えた。

だよな、あれ嘘だし。

「…あ。オレ、ちょっと用事思い出したかも…じゃあね、鴨川さん」

篠崎はそそくさと帰っていった。

笑美はがっくりと肩を落としていたが、俺はもう笑いを隠しきれなかった。

「夢の対決が…」

「で？あいつらは何なわけ？」

話を変えようと、俺はまた泥沼にはまっていく。

「んーと、超能力といえば超能力なんだけど、気付かないうちに能力を使ってる感じなんだって」

「うん？」

超能力とどう違うんだ。

制御出来てないと超能力じゃないのか？

「罪を売るんだって」

「…罪をなすりつけるんじゃないのか？」

それは絶対になすりつけるだと思ふ。

「ううん、罪を与える能力なの！言いかえれば、試練を与える天使か神様、仏様！」

「話がでかいな」

神様仏様はないだろう。

「うん、まあね。今回は直接インタビューとかできないから…どうしようかなあ」

「別にいいだろ、写真撮るくらい」

「そうだね、香月ちゃんと星哉くん！」

「何？」

「誰？」

「私ね、2組の鴨川笑美って言うんだけど」

「…ああ、知ってる」

「あのね、私、卒業までにいろんな人と写真撮っておきたくて、でね、一緒に撮ってもらっていいかな？」

双子は無言で顔を見合わせた。

「「嫌だ」」

アルトとテノールがきれいにハモる。

しかし、笑美を挟んでピースして立った。

撮れってことか…。

「はい、チーズ」

「…ありがとうっ」

笑美がにこにここと笑う。

双子はふっと鼻で笑った。

「私達」

「別に」

「「突然じゃんけんしたくなっただけだから」」

…嘔吐きめ。

「鴨川さんって、彼氏いたのね」
「電波系って聞いてたけど」
「私達にも、何か電波を受信して話しかけてきたのかしら」
「そうかもしれないね」
「だとしたら、何かな」
「さあ？嘘吐きだからじゃない？それか、それで浮いてるから」
「そうだったところで関係ないわね」
「そうだね」

とんとん、ノックの音がある。

「…香月ちゃん、星哉くん、ご飯できましたよ」

一度お腹が鳴った。

「…いらないわ」
「…いらない…」

継母はにっこり笑う。

「そう、残念だわ」

一度、私達のご飯をつまみ食った猫が死んだ。
継母の行動はすべて、私達を死に追いやろうとする。

「…嘘を吐き続けたら…」
「…反抗し続けたら…」
「生き延びれる、よね？」
「…生き延びれるんだ」

私達は生にすぎるあまり、人間にすぎれなくなった。

罪を売る嘘つきな双子——了

記憶を殺す記憶喪失の生徒会長

時折、壊れそうになる。”昔”の記憶が溢れ返って、気が狂いそうになるんだ。

僕は誰だ。

——西条遼太郎。いや、違う。僕の名前は西条りょう。

彼は誰だ。

——甚雨淳之助。これも違う。彼は甚雨淳。

ならば、”昔”っていつだ。

——…前世。西条遼太郎も、甚雨淳之助も、大正時代に生きていた僕達。

+++

「りょう、また徹夜？」

「…ああ、おはよう甚雨」

淳はネクタイを調節しながら、自然に隣を歩く。耐えがたい苦痛だ。

記憶がフラッシュバックする。特に、彼が柱に凭れて座っている時なんて吐き気がするほど。僕が”淳之助”を殺す記憶。柱に串刺しにする記憶。そしてその死体にキスする記憶。それと目の前の光景が重なってしまう。前世と似た名前というのがまた何とも言えない気味悪さを増長させる。

あれは、僕の前世だ。罪に塗れた、汚い感情。

「何か考え事？生徒会の仕事、忙しいのかい？」

「…ああ…まあね」

「最近元気ないけど、本当に大丈夫？」

「大丈夫」

近寄らないでくれ。笑わないでくれ。

この手が、今度は君を絞め殺すかもしれない。シャープペンシルをその首に突き刺すかもしれない。この両手で君を道路に突き飛ばすかもしれない。

「…生徒会室に用があるから、先に行つてて」

「りょーかい」

淳は、途中までは一緒に行くつもりなのだろう。変わらないペースで隣を歩いている。

「僕、何かしたかな」

「…何かって？」

「りょうを怒らせるようなこと」

「僕がいつ怒ったんだ」

「うーん…。なんか、最近ツンケンしてるっていうか…」

「……そんなわけないだろ」

ひゅっと喉が鳴った。ああ、だめだ。そう思った瞬間、膝がかくんと折れた。

呼吸を正そうとしても、だんだん呼吸が浅くなる。

「…？」

手足がしびれてきた。大丈夫、と言いたいのに言えない…。息をしてるのに、息がつまりそうな…。苦しい。

「甚雨先輩、どいてください！過呼吸ですよ！！」

「え？何、りょうは大丈夫なの!？」

通りがかった女子生徒が紙袋を僕の口にあてた。死ぬ…。あ、過呼吸じゃ死なないんだっけ…。何でこの子紙袋なんて持つてるんだろう…

ゼエゼエと自分の息がずいぶん遠くから聞こえる。寝れたら楽なのに。あ、でもちょっと眠いかも。全身がしびれている。こんなにたくさんの人の前で倒れてはいられないのに、立ち上がれもしない。

「ありがとう。保健室へは僕が連れていくよ。君、名前は？」

「2年2組の鴨川笑美です！」

「あとでお礼に行くよ」

「そんな、いいですよ。早く保健室に連れて行ってあげてください。それじゃ！」

いつの間にか呼吸は元のように戻っていて、淳に抱きかかえられていた。…疲れた。寝てしまおう。

電化製品の電源を切るように、…こんな風に、意識をシャットダウンしてしまえたら、どんなに楽だろう。

+++

夢を見た。

淳を殺す夢。柱に串刺しにする夢。そしてその死体にキスをする…”淳之助”が僕の手を取る夢。

「ジュン！」

思わず飛び起きていた。

「何？」

「…あ…あれ？生きてる？」

「何、僕が死ぬ夢でも見た？物騒な夢だなあ」

「…うん」

淳はベッドの横で小説を開いている。

「授業は…？」

「心配だからサボった」

「…何してるんだよ」

「淳って呼ばれるの、久しぶりだったからびっくりした」

淳之助、と言わなくてよかった。空を掴んだ右手が掴もうとしたのは、間違いなく”淳之助”の手だったから。だけど、ああ。君が包みこんでくれていた、忘れていた記憶が見えたよ。

ずっと視界の端で淳が腰を上げるのが見えた。僕のあごを掴み、それを僕が理解する前に唇をべろっと舐めた。

He remembers——淳のモノローグ

「じゅん…」

りょうが喘ぐように掠れた声を出す。前世の僕は、よく遊女のように形容していただろうか。実際に女に生まれたりょうは、あの”遼太郎”より数倍綺麗だ。頭を撫でると、りょうは満足したように息を吐いた。

りょうはたまに、僕を淳之助と呼ぶ。最初に呼ばれた時はあだ名だとかごまかされたが、あの様子だとりょうにも前世の記憶があるのだろう。前世の僕を殺す記憶が。

僕は構わなかったけれど、それがストレスになって今回過呼吸を起こしたなら、彼女から離れるべきなのだろうか。

「じゅ…の、すけ」

悪い夢なら、覚めてあげてほしい。”淳之助”だって、”遼太郎”が望まない形ではあつたらうけど確かに彼を愛していたのに。”僕”

は輪廻の途中で全て受け入れたのに。

何の障害もなく結ばれることのできる形で生まれたのに、また彼が邪魔をする。

「…君は結局何がしたいのさ、遼太郎」

「ジュン!!」

りょうが手を伸ばして飛び起きた。伸ばした手が空を切っている。もしかして、聞こえただろうか。僕に前世の記憶があることがばれてはいけない。冷静に、答えなければ。

「…何？」

「…あ…あれ？生きてる？」

そりゃ、生きてるよ。もう君に刺されても、君を遺して死んだりしない。僕を絞め殺そうとしたって、シャープペンシルを首に突き刺されたって、道路に突き飛ばされたって。

「何、僕が死ぬ夢でも見た？物騒な夢だなあ」

「…うん」

けれどその瞳には、ここ最近の憂鬱そうな影はなかった。…何か、克服できたのかもしれない。

これで僕らは、幸せになれるのだろうか。

「授業は…？」

「心配だからサボった」

「…何してるんだよ」

「淳って呼ばれるの、久しぶりだったからびっくりした」

立ち上がり、ベッドに片膝を乗せる。右手で細いあごを掴む。りょうはぼんやりと僕を見ているばかりだ。軽く口づけると、開いたままだった目がさらに大きく見開かれた。舌でなぞった彼女の唇は、とてもすべすべして、熱かった。

「…………っ！な、なにすんの…っ」

信じられない！きもい！と非難され、強がりだとわかっていても少し傷付く。手で鼻と口を塞ぐと彼女はすぐに黙った。

「うなされながら僕の名前呼んでるのが可愛くって。さすがに寝てるときはやめとこうと思ったけど…」

「そういう問題か!?違うだろう！」

熱い。熱い。熱い！そう言いながら乱暴にふとんを蹴る姿に、思わず笑った。

「制服…スカートだよ？覚えてる？」

りょうが慌ててスカートを正す。しわになってなきやいいなあ、と他人事ながら思う。

「…………今日は醜態を晒してばかりだ」

「それも可愛いよ、りょう。なあ、悩みがあるなら僕に言ってくれ。もしも僕を殺したいっていうなら、それも全部受け入れるくらいじゃない」

「悩みは、もう解決した…。解決したんだよ、ジュン」

その姿が美しいと思うのは、ああ、僕を殺す決心をした時のような真っすぐな瞳だからだ。

記憶を殺す記憶喪失の生徒会長――了

不思議な夢を集める天然な問題児

「渉汰が超能力者で、篠崎くんがロボット、足立さんが楽譜を食べちゃう超能力者で…。あ、そうだ、先輩は靈感があるんだ…」

写真を見ながら、ブツブツ呟く笑美。

今までの『変人』達とのツーショット(双子の時は3人だが)写真だ。

「はぁ…。なんで私には特技とかないのかなぁ」

「…足立のは超能力なのか？」

「今の問題はそこじゃないでしょ！」

特技ならあるだろ、という言葉飲み込む。なんでも幻想的に変えてしまう特技。紙袋で生徒会長が倒れた時に処置したのも、魔法のようだった。だって、ただの紙袋だぞ？

だけどその称賛は、笑美にとって「魔法のよう」という例えでしかない。

「空を飛ばたいとか言ってたな」

「お姫様だっこじゃいや」

「わがまま」

「だって…」

笑顔はふいに泣きそうな顔に変わる。

俺はこいつにとって人を消す超能力者だったか？

”えみ”を消す男。俺と一緒にいることは幸せなのか？

「くだらない幻想なのかな。やっぱり」

ぼそりと呟かれた言葉が彼女特有の温度と柔らかさを失っていたのは、きっと聞き間違いじゃないだろう。

彼女は出会った頃のような静かな声で、ぼつりぼつりと語りだした。

おとぎ話なんてくだらない。これはね、ママの口癖だったの。私は小さい頃から夢見がちで、おとぎ話が大好きだった。

だけどき、ママから本格的におとぎ話を取り上げられたのは小学校入学のときだった。お受験ね、失敗したの。頑張ったんだよ。でもね、だめだった。知ってる？小学校のお受験って結局はくじ引きなんだって。

おとぎ話なんてくだらない。ひらひらしたレースも、甘いお菓子も、勉強より遊ぶことが好きなお友達も、くだらない。ママはそれらが私にとって毒だと言ったの。それでね、公立の小学校に通うことになった小学一年生の私は思ったの。それらが好きな私は、…私も、きっと毒なんだ、ってね。

毎日塾に行ったよ。…今も行ってるけど、今よりずっとハードだった。

ママがひどいと思う？だけどね、私ママが好きだったの。だから、「いい子」になろうって頑張ったの。「毒」を避けて過ごしたし、毎日毎日勉強も礼儀作法も、何もかも頑張った。

神様なんていないのかな、って思ったのは…中学受験の時。私、熱出しちゃって…。結果は…聞かないでね？ママは…それからは、もう私のこと見てくれなかったなぁ。

そんな顔しないで、渉汰。私、もうママの顔色を窺ったりしてないんだから。

ふふっ、私の名前ね、『美しく笑う女の子に育ててほしい』っていう意味があるんだって。ママが言う『美しく笑う』っていうのは、優雅で清らかに微笑むだけ。中学のクラスメイトがね、面白いことを言ったときに思わず噴き出して声上げて笑っちゃってね、みんなが驚いた顔で可愛いって言ってくれたの。あ、違う違う、可愛い自慢じゃないの。ちゃんと聞いて。それまではね、笑ってる顔だけど本当に笑ってない顔だったって。死んでるみたいだったって言われたの。

笑美は俯いたままくすくす笑った。骨ばった肩がかくかく揺れる。それはまるで頭を支える糸が切れた操り人形のように。

「あれから、私はあんま現実見れてないのかな…。わかってるんだ、私…」

顔を上げた笑笑は笑っていた。これが、『美しい笑み』なのだろう。ずっとずっと、この笑みを張り付けていたんだろう。泣くことを、知らないんだ。

思わず、引き寄せていた。

「わっ」

「泣け。こうしてればお前のママには見えないから」

ぎゅうっと頭を抱きしめる。

「私ね、泣けないの」

「うん」

「泣い、ちゃ、だ、だめっ、で」

「誰がそんなこと言ったんだ？神様か？神様なんて、いないんだろ」

「ふえ…っ、うっ、しょうたあ」

細く柔らかい髪に指を絡める。

人は時に、過去が重くのしかかって息さえできなくなる。泣ける人間は泣くんだ。嗚咽で嫌でも息を吸い込むから。だけど泣くことができない人間はどうなる？体が酸素を欲して過度に呼吸することになる。

笑笑はしばらく動かなかった。子供でもあやすように、昔祖父が歌っていた下手な鼻歌をなぞりながら背中を叩く。俺、いつもこうやってもらって落ち着いてた。忘れてたな。

「…ありがとう…」

俺はいつもその笑顔に魔法にかかったみたいに救われているのに。こいつを離さなければ、いつか伝えることもできるだろう。

Teachers——観察者の判断

「うーん…」

「どうしました？筒井先生」

コットン、と目の前に缶コーヒーが置かれる。一体私の好きなコーヒーのブランドを覚えたのはいつなのだろう。こうも日課になってしまっ
ていては彼女の反省の色も薄い。温かいうちに缶コーヒーを開けると、いつもの香りが鼻腔をくすぐった。

「すいません、今日も起こしてもらっちゃって」

「いいえ…。それより、あなたのクラスの鴨川さん…成績どうしようかしら」

「笑笑ちゃんですか？成績いいじゃないですか」

「点数はね。問題は出席数なのよ…」

「鴨川ですか」

不意に声をかけられ、コーヒーを一旦机に置いた。ベテランの数学の先生だ。

「確かに点数上の成績はいいですが、授業態度が問題ですな。今日も授業中にいきなり教室を出て行ってしまったんですよ。まったく、落ちこぼれの代表のような子だ」

彼女の眉が不愉快に歪むのを見もしないで、先生は続ける。

「ああいう教師をなめた態度をとる奴は留年させてやればいいんです」

「鴨川さんはとても素敵な子ですよ」

「とても素敵な子は授業中に歩いたりしません」

「堀田くん、篠崎くん、足立さん」

「…？」

「…先生の言う落ちこぼれのおかげで、学校に来るようになった子達です。面倒見のいい、いい子です。それに鴨川さんは予習も復習もちゃんとやっています」

いつもはおっとりしている彼女が一気にまくしたてる。

「だめ、飯野先生っ」

「授業中に出て行かれるような授業をする先生にも問題があるのではないですか!？」

…言っちゃった…。思わずこめかみを押さえた。私の受け持っているクラスの生徒からも、この先生の授業は教科書をなぞるだけでわからないと苦情が出ているが、ベテランの先輩であることもあって言えやしなかったというのに。

「な、何だと…！」

「せ、先生…失礼ですが、鴨川さんが授業中に出て行くななんて聞いたことはありません。しかも、現に鴨川さんは先生のテストで満点を取って設問の問題を指摘したそうですね…？」

「なぜそれを…！」

わざと大きな声で言ったのは、学長にも聞こえるようにだ。目論見は成功したようで、学長がこちらへ歩み寄ってきた。ジェスチャーでも関わるなど示され、脱力と共に椅子に座りこむ。

「はあ、久しぶりにむかついた～」

「もう、寿命が縮んだわ」

「筒井先生、ありがとう」

「私は、個人的な感情で生徒の人格を否定するなんて許せないだけ」

「笑美ちゃんは、ちょっと天然だけどとても優秀な問題児ですよ」

「矛盾してます」

「笑美ちゃんはね、人を救える子なんですよ」

飯野先生はあっさり言う。こういう風にあっさり言うから、誤解してしまうのだ。飯野先生はただのねぼすけでピアスを3つも付けている頼りない先生だと。

「…でも、出席数が足りないのは人格じゃ補えないのよねー」

「あう…。補講で…！補講で勘弁してあげてください！」

鴨川笑美。

彼女を中心に、彼女にも気付かないうちに周りが正しく動き出す小さな歯車を持っている。人はそれを、魔法のようだと形容するのだ。

不思議な夢を集める天然な問題児――了